広報新聞

'13.3.No189
発行責任者 市岡昭夫
0863-88-5292

活彩 祖谷村 大変だ

三月は卒業式が各学校でありますが、別れの季節とか「旅立ちの季節」と言われています。春風と共に、心おどる季節でもあります。

活彩祖谷村にとっても、三月は記念すべき月です。二〇〇六、三、五に独立記念式を開き、「村」として活動をはじめました。以来、八年目となります。村民も二〇〇名を越えていますが、ここ二〇三年、組織活動は、ほとんどありません。村としての存亡の危機とも言えます。

活動が見えなくても村民がいる限り、継続はされてきますので、そんなに気張ることもない様なものですが、主立った人達がいればなんとかなるのでしょう。

今はもっと我慢の時期なのかも知れませんが、意識的にしがらみとなれば時に流されてしまい、自分達の位置を忘れがちになってしまいそうです。

誰かがやるだろう、では何も見えてこなくなり、何も出来なくなってしまうのではないだろうか。活彩祖谷村が元気になるには祖谷に根ざした、自己力で出来る事を急がず積み重ねるしかないとおもいます。

ノンビリした田舎で いいじゃなッ

そろそろ、「街がよい」という考えを変えなければ、どうしようもなくなって、気がつけば、祖谷という地域は、忘失してしまうかも知れません。

今、住んでいる人達が、祖谷のもの差こそ、もって、価値を決めていかなければ、十年後、どんな人達が見えなくなるのでしょうか。

「何事がないからダメ」ですか。人がいないからダメ」ですか。何もないですか。

山には山の風が吹いてます。同じ風とよばれても、違う風です。同じように、山とよばれても、地域によって違うのです。全部ダメな地域となければ、全部イイ所という所もありませんよね。

自分達の住んでる地域の良い所を出していくことがいいじゃないかえ

弥勒菩薩 に対するおもい

二月、No188で書きました、祖谷一揆のリーダー三名についての続きです。大枝の国五郎、西山の円の助、そして小川の武右衛門。円の助、武右衛門については、お墓境内にそれぞれの名があるが、弥勒菩薩が祀られています。大枝では、子持ち地蔵として祀られているが、集落の人々には、国五郎を祀っていると言い伝えられ、弥勒菩薩として、お墓境内にありました。

拓木が倒れ、ふさぎ屋根が壊れているので、地区の人の力を借りて、周辺美々、清掃させてもらいました。

弥勒菩薩は、釈迦滅後五億七千万年後にこの世に現れて、衆生を救ってくれると信じられている仏で「未来仏」とも言われているそうで、祖谷の人々が、三人への熱い想いを込めてこうした地蔵尊として祀られてきたのでしょうです。